

第 7 回「日中未来創発フォーラム」(北京) 参加報告レポート

岡山大学大学院
社会文化科学研究科博士前期課程 2 年
高野かずみ

このたび、北京で開催された第 7 回「日中未来創発フォーラム」に参加する機会を得た。筆者は本フォーラムに先立って、この“日中交流”のうち日本側からの参加者、殊に現地の日本人留学生に対し、懐疑的な感情を漠然と抱いていた。それは自身の経験に起因するものである。かつて初めて中国を訪れたとき——上海での語学研修と記憶している——現地の日本人留学生とのやりとりの中で、語学力や文化的適応について侮蔑的ともとれる言動にショックを受けたことを不意に思いかえす。慣れない中国語で教員や学生らの会話に参加していたあの瞬間、日本人留学生の一言、“Sorry guys, she’s confusing.”——あのときほど他人を嫌悪したこともそうはあるまい。言語はときに人間を最も強力に分断し疎外する武器になる。同胞たる「日本人」にもかかわらず、異国の地では彼らから最も強く「部外者」として扱われたことが、長らく筆者の中にしこりを残していた。

しかし今回の参加を通じて、長年の価値観に揺らぎが生じた。所属グループには日本人留学生もいたが、かれらは常に思慮深く、対等な姿勢で議論に参加していた。過去の記憶に由来する「日本人留学生＝敵対的存在」という構図が氷解し、自身の奥底に横たわる心の傷がわずかに治癒していることに気づかされた。グループワークにおいては、各々の発言や提案が錯綜するなかで筆者がサブファシリテーターとして意見を整理し、議論の方向性を定める役割を担うことができた。結果として、チーム全体が一体感を持って発表に臨めたことは、複数人でおこなう学習活動の実践として大きな意味を持つものであった。

フォーラム全体を通して印象的だったのは、「生活・教育・文化」という 3 分野にわたる発表のなかで、いずれも「健常者」を前提とした議論がなされていた点である。とくに生活分野において、乳幼児から高齢者までのライフスタイルを論じる中に、身体・知的・精神障がいをもつ人々の視点がほとんど含まれていなかったことに違和感を覚えた。この問題意識は、筆者が大学院で研究するかたわら学部の学芸員課程を履修し、博物館と福祉分野の連携に関心を抱いているという事情に端を発している。たとえば日本では「博福連携」の試みがすでに議論され、実践的な先行事例(※1)をとおしてミュージアムが障がい者の社会参加や学びの場として重要な役割を担いつつある。一方、中国には国家資格としての「学芸員制度」が存在せず、ミュージアムの役割も教育・文化の枠に留まっているという。

前述の“違和感”の背景を注意深く読み解くと、社会全体に根づいた価値観や倫理観の在り方に思い至る。たとえば栗屋剛ら(2014)による日中韓の大学生を対象とした調査(※2)では、出生前診断や着床前診断に対する中国・韓国の肯定的態度が日本と比べて顕著に高いことが示されている。とりわけ「優れ

た資質の子ども」を得るために精子バンクを利用することに同意的回答率が中国で 60%以上、韓国で 80%を超えていたのに対し、日本では 6%程度に留まっていた。また出生前診断で障がい児と診断された場合でも「産みたい／産んで欲しい」と考える割合は日本が中韓の二国よりも高い結果となったという。この差異には家族主義的倫理を重視する儒教文化や、于麗玲ら（2013）が報告(※3)するような中華人民共和国母嬰保健法や「優生優育」政策といった歴史的な文脈の影響が想定される。他方、近年の日本においては SDGs に基づいた個人の尊厳や多様性への配慮に関する議論が積極化する傾向がみられ、それにより「障がいを持つ子どもを生む選択」に対する肯定的な気運が醸成されていると予想できよう。

今回の発表では障がい者の視座の現状が明らかとなったが、ここで先に述べたミュージアムが果たしうる福祉的役割の話題に戻る。日本をはじめ世界各地で「生涯学習社会」の理念に基づき、博物館と福祉機関が連携して障がい者や高齢者などの社会的に周縁化されやすい人々の社会参加を支援する取り組みが増加している。中国においても、急速な都市化と社会の多様化が進行する中で、ミュージアムが持つ「公共性」への期待は今後高まる可能性がある。とりわけ、中央政府によるトップダウン型の制度構築が困難な領域においては、地方行政や民間組織がゆるやかに連携し、文化施設が福祉ネットワークのハブとしての役割を担うことが期待される。これは中国における地域社会レベルの障がい者福祉の拡充を支援する一案として、検討に値するアプローチであろう。

このように、本フォーラムは単なる交流の場にとどまらず、筆者をはじめ各参加者の個人的な視野を相対化し、属性の異なる他者と共に将来の社会を構想する場として機能した。国際的な学生交流の場で浮き彫りとなる「見えない前提」の存在こそが、文化の違いに対する深い理解を促す契機となるのである。

※1 最近では九州国立博物館による感覚過敏・発達障がい者のためのカームダウンスペース「あんしんルーム」の設置が記憶に新しい。詳細は九州国立博物館ホームページ「バリアフリー情報「あんしんルーム」」(https://www.kyuhaku.jp/visit/visit_barrierfree_anshinroom.html) の情報を参照されたい。

※2 Yu L, Kato Y, Shishido K, Doi H, Jin Hm, Wang Jg, Ikezawa J, Awaya T. A questionnaire study on attitudes toward birth and child-rearing of university students in Japan, China, and South Korea. *Acta Med Okayama*. 2014;68(4):207-18.

※3 于麗玲, 塩見佳也, 加藤穰, 穴戸圭介, 池澤淳子, 栗屋剛「中華人民共和国母嬰保健法にみる「優生優育」政策」(『生命倫理』, 2013 年, 23 巻, 1 号, pp. 125-133) 。